

# 日本結核病学会関東支部学会

## —— 第171回総会演説抄録 ——

平成29年2月18日 於 東医健保会館（東京都新宿区）

（第223回日本呼吸器学会関東地方会と合同開催）

会 長 加 藤 誠 也（公益財団法人結核予防会結核研究所）

### —— 一 般 演 題 ——

**1. 結核菌型別のVNTR検査法とマルチプレックス法を組み合わせた結核/BCG鑑別の試み** °瀧井猛将・安田直美（結核予防会結核研究所抗酸菌部結核菌情報）前田伸司（北海道薬科大薬学科生命科学）山本三郎（株日本BCG製造中央研究所）

結核菌とBCG Tokyo-172はキャピリアTBでは区別できない。そこで、結核菌型別のVNTR検査とマルチプレックスPCRを組み合わせたBCGの鑑別を検討した。BCG臨床検体は、製品ロットと同一であった。東京都内の結核（227検体）と比較してVNTR法によりBCGを推定することができるが、鑑別にはマルチプレックスPCRが必要であることが示された。本研究は中崇博士と藤原永年博士との共同研究である。

**2. 再々発肺結核患者の毎日DOTSによる多職種連携**

°大嶋圭子（群馬大医附属病看護）山口公一・久田剛志（同呼吸器・アレルギー内）

症例は40歳代男性、肺結核にて2度の化学療法を経て管理検診中であった。再発し都内の病院で3度目の治療を行った。飲酒の継続が原因と考えられ、退院条件として連日のDOTSで服薬支援・生活指導を継続することとした。そこで保健所、薬局、医療機関で支援体制を構築した。結果、患者は治療完遂へと繋がり、多職種連携の取り組みを経験したため報告する。

**3. ホームレスとなった30代外国人男性結核患者の対応に苦慮した1事例** °永田容子（結核予防会結核研究所）

泥酔して保護され、警察、大使館を経由して救急外来受診にて結核性髄膜炎および肺結核と診断された。在留資格（技能ビザ）があるが会社の倒産、本人のアルコール問題で仕事が長続きせず会社を転々としており、居住地も定まっていなかった。2カ月間入院後外来治療となる際、保険未加入であり、生活保護も適応されず保健所も結核専門医療機関も苦慮した。無料定額入院制度の活用、

査証更新手続きの同国人の協力が治療継続を支えた。

**4. 在宅高齢結核患者に必要な支援の検討** °島村珠枝・浦川美奈子・永田容子（結核予防会結核研究所）

〔目的〕日本の結核患者のうち約4割を80歳以上の高齢者が占めており、在宅での支援が課題となっている。在宅高齢結核患者のケース検討により在宅高齢結核患者に必要な支援を検討する。〔結果・考察〕診断時在宅であった80歳以上の高齢結核患者について分析を行った。診断時在宅であっても入院によるADLの低下や認知症等により服薬の管理が困難になる。DOTSの円滑な実施のためには介護保険サービス等との連携が重要である。

**5. 服薬アプリによるモバイルDOTSを併用した結核療養の検証** °浦川美奈子（結核予防会結核研究所対策支援部保健看護学）

〔目的〕結核低蔓延下における利便性のよいDOTSの方策の1つとして、服薬アプリによるモバイルDOTSを併用した結核療養を検証し、今後の活用ポイントを探る。〔方法〕実際にこの方策を結核の療養に取り入れた患者と支援者のインタビューからまとめた活用ポイント（案）を、患者と支援者に提示し、検証を行う。〔結論〕主な項目として、患者発信と支援者からの発信、活用に必要な連絡と記録について報告する。

**6. 東京都内の保健所に対する日本語学校結核検診についてのアンケート調査結果** °高柳喜代子（結核予防会総合健診推進センター）永田容子（結核予防会対策支援部保健看護学、同外国人結核相談室）

〔背景〕20代の新登録結核患者における外国生まれの者の割合は半数を超えた。都内では多くが留学生で日本語学校結核検診での発見率も高い。校内での感染事例も多発し対策が急務である。〔目的〕都内保健所が把握する日本語学校結核検診の実施状況、患者発見や治療上の課題を調査する。〔対象〕東京都の全保健所。〔回収率〕96.7%。〔考察〕実施状況や受診数、患者数、寄せられた

意見などから検診のあり方や対策を考察する。

**7. 結核性アジソン病と考えられた1例** °永吉 優・山本真弓・野口直子・水野里子・石川 哲 (NHO千葉東病呼吸器)

61歳女性。結核接触者健診にてQFT検査陽性となり潜在性結核感染症と診断した。X年12月INH内服を開始したが副作用のため治療中止となった。X+1年3月より関節痛、色素沈着などの症状出現。血中コルチゾール低値ACTH高値、CT上で両側副腎腫大を指摘された。副腎結核と診断しステロイド補充療法および12カ月間の抗結核治療を施行、治療中に副腎縮小、石灰化所見を認めた。結核性アジソン病と考えられた1例について報告する。

**8. 肺門リンパ節より波及したと考えられる中葉結核の1例** °大澤 翔・山田 豊・増田美智子・阿野哲士・菊池教大・石井幸雄 (NHO霞ヶ浦医療センター呼吸器内)

症例は83歳男性。検診異常のため、当院呼吸器内科を受診した。胸部CT検査で右中葉に小粒状陰影、浸潤影を認め、中葉症候群、抗酸菌感染疑いにて、気管支鏡検査を施行した。右B4/5分岐部に乾酪物質様の構造を認め生検を実施。気管支洗浄液・喀痰から結核菌を認めた。肺門リンパ節の石灰化を認めており、内腔所見と合わせて肺門リンパ節から波及したと考えられた。中葉結核は比較的まれであり、若干の考察を加えて報告する。

**9. 慢性アルコール性肝炎に合併した播種性結核の1例—肝障害例におけるリネゾリドの有用性** °笹谷悠惟果・後藤 瞳・野中 水・重政理恵・荒井直樹・矢崎 海・石川宏明・兵頭健太郎・根本健司・三浦由記子・高久多希朗・大石修司・林原賢治・齋藤武文 (NHO茨城東病胸部疾患・療育医療センター内科診療部呼吸器内)

47歳男性。発熱、呼吸困難を主訴に救急搬送され、播種

性結核、敗血症性ショック、DICと診断し、抗結核薬の投与、呼吸循環管理、DIC治療を開始した。慢性アルコール性肝炎のため、SM、EB、LVFXの3剤で治療開始したが、重度の肝障害をきたしLVFXをリネゾリドに変更したところ肝障害は改善した。本症例のリネゾリドの使用は短期間だが肺結核へのリネゾリドの使用経験は少なく、文献的考察を加え報告する。

**10. 肉芽腫性肝疾患の経過観察中に肺結核を発症した1例** °本多紘二郎・田中良明・奥村昌夫・佐々木結花・吉山 崇・尾形英雄・後藤 元 (結核予防会複十字病呼吸器内) 菊池文史 (同病理診断) 黒崎敦子 (同放射線診療) 大滝美浩 (公立昭和病呼吸器内)

症例は72歳男性。結核の治療歴がある。約1年前に発熱、肝脾腫、肝胆道系酵素上昇の精査で他院にて肝生検を施行。類上皮細胞性肉芽腫を認め、肉芽腫性肝疾患として経過観察中であった。約2週間前より食欲不振と呼吸困難を認め他院を受診、呼吸不全と腎障害を認めた。喀痰検査を行い、抗酸菌塗抹陽性、TB-PCR陽性。肺結核の診断で当院に紹介となった。抗結核薬を開始するも治療の甲斐なく入院第26病日に死亡に至った。

**11. 急性骨髄性白血病の経過中に全身結核を発病した1例** °高崎 仁・森野英里子・塩沢綾子・橋本理生・仲 剛・飯倉元保・泉 信有・杉山温人 (国立国際医療研究センター呼吸器内)

17歳女性。急性骨髄性白血病と診断され、他院で抗悪性腫瘍薬にて治療中に発熱をきたし、粟粒結核、縦隔リンパ節結核、多発脳結核腫、肝結核と診断された。PZAにて皮疹を認めたためRHE3剤による長期間の加療中に発熱と新たな肝脾病変を認めた。腹腔鏡を用いた切除検体のLine Probe AssayにてINH耐性化が判明したため、RHZE+THに変更、最終的にAMKとCSを加え、同種骨髄移植に臨み、結核治療終了、緩解となった。